「神谷美恵子の世界」を読んで

「神谷美恵子の世界」を読み終えた。

神谷美恵子は、「生きがいについて」、「人間をみつめて」、「こころの旅」等の著者であり、１９才の学生時代のハンセン病療養所訪問で大きな衝撃を受け、「病人が私を待っている！」と２７才から医学を学び、精神科医としてハンセン病の方々の医療に携わった人として、よく知られている。

私は、「こころの旅」の初版（1974）を読んで以来、自著の中でも触れており、各学校の授業でも学生に「心の旅」を推薦し、また、ＴＶでの「神谷美恵子」の特番（４時間）のビデオも大事に保管している程の自称：神谷美恵子：隠れファンである。

どこに、魅力を感じるかといえば、とにもかくにも、その生き方の真摯さ、直向きさに圧倒される。

この度の本は、アルバムや詩、講演録、そして、知人、友人、後輩、同僚等が、神谷美恵子を語る寄稿文で構成されていた。改めて、神谷美恵子の足跡を知ることができ、またまた感激！

寄稿文の中に、「新しい設備や装置や機械によって省けるエネルギーは、あくまで看護師さんの『人間らしさ』を保つために用いて欲しい。看護師さんこそ医療における人間らしさの最後の砦である」という本人の言葉を引用しつつ、患者に向き合う姿は、「医師というより、看護師観に近かった」という。つまり、そうした看護師観が、病による絶望の淵にあると思われる患者でも、患者自らの「生きる存在」を体験させ得るということのようである。

今私は、「緩和ケア」に少し係わっているが、こうした看護師観で利用者に寄り添う看護師さんたちの姿を拝見できることは、大変恵まれていることと改めて思った。また同時に、日常の人間関係においても、神谷美恵子が云わんとする、お互いが「側にいるだけでも生きる存在意味がある」ことを大事に更に思索したいと思う。

しばらく本棚で眠っていた「生きがいについて」を、改めて読み返してみようと思う。

（2004 年 11 月 14 日　記）